

令和7年度 狛江市立狛江第一中学校 学校評価

■当てはまる ■まあまあ当てはまる ■あまり当てはまらない ■当てはまらない ■わからない

質問	取組指標		成果指標			分析
	教員	生徒	保護者	保護者	保護者	
1 自分も他者も大切にしようとする姿勢が身に付いている。				<p>教員の評価が高く、日常の学校生活の中で「自分を大切にしようとする姿勢が身に付いていることが分かる。生徒・保護者も同様に高く評価しており、学校生活が安定して機能していることが分かる。一方で、取組指標に比べて、成果指標の数値が若干低いことから、教員が生徒のよさを認め伝えたり、保護者に共有したりすることが大切と考える。自分も他者も大切にしようとする姿勢は、学校の基盤的な強みであり、今後も大切にしていく。</p>		
2 各教科の基礎的・基本的なことが身に付いている。				<p>教員・生徒・保護者ともに基礎学力の定着について一定の成果が認識されている。一方で、「とてもそう思う」の割合が高くなく、生徒自身が「できるようになった」という強い実感をもつまでには至っていない層も存在する。また、生徒・保護者とも教員の肯定的評価に大きく差が見られることから、基礎的、基本的事項の定着と成果の実感が十分に図れるような授業改善、評価規準の明確化や到達度の可視化が必要である。</p>		
3 運動やスポーツ（遊びや部活動を含む）にすすんで取り組む姿勢が身に付いている。				<p>生徒・教員の肯定的評価が7、8割あり、学校生活の中で運動や部活動が生徒の意欲や自己肯定感の醸成に寄与していることが読み取れる。保護者の評価からも、成果が家庭からも確認されている。今後は、運動の日常化や豊かなスポーツライフの創造を目指した学校としての取組の改善が必要である。</p>		
4 英語学習に楽しく取り組んでいる。				<p>7割強の生徒が英語学習を「楽しい」と捉えており、授業を好意的に考えている。一方、「とてもそう思う」が3割程度にとどまっていることから、楽しさは感じているものの、達成感や自信にまでは十分つながっていない生徒もいると考えられる。今後は、成功体験を実感できる活動を増やす等、引き続きの授業改善と授業参観などでの取組の可視化が必要である。</p>		
5 ICT機器を学習で活用する力が身に付いている。				<p>教員・生徒の指標と保護者の指標と差異がある。家庭からは学習でのICT活用の様子が見えにくいことが要因と考えられる。また、生徒の1割強が十分に身に付いていると感じていない点から、スキルが身に付いていなかったり、操作的活用にとどまったりしている可能性もある。今後は、「何ができるようになったか」を明確に示す取組が必要である。</p>		
6 学校行事や委員会活動、生徒会活動、部活動にすすんで取り組んでいる。				<p>教員は生徒の参加意欲を高く評価しているが、生徒自身の評価は低い。これは、「参加していること」と「主体的に取り組んでいる」という意識の差によるものとも考えられる。保護者の評価も生徒の評価と同じ傾向にあることから、家庭内での子供の声を聞いて保護者が評価しているものと考えられる。今後は、「生徒が主役」となり、生徒が役割を主体的に担い、達成感を実感できるよう、参画意識を高める工夫が必要である。</p>		
7 生き方や望ましい職業観が増した。				<p>教員・生徒の肯定的評価が7割を超えており、キャリア教育を通して生徒が将来や生き方について考える機会が一定程度確保されていることがうかがえる。一方、保護者の肯定的評価は約4割にとどまり、家庭での会話や行動の変化としては十分に実感されていない面もあると考えられる。今後は、キャリア教育で学んだことを振り返り、発表する機会を充実させるとともに、家庭と共有できる取組や取組の可視化を進めていくことが重要である。</p>		
8 学校や家庭・地域の中で挨拶をする等、基本的な生活習慣が身に付き、実行している。				<p>教員・生徒・保護者の肯定的評価の割合から、挨拶や規則正しい生活などの基本的な生活習慣が、日常の行動として概ね定着していることがうかがえる。引き続き、学級や学年での継続的な指導に加え、家庭と連携した取組を充実させていく必要がある。また、個別の支援や生徒への意図の伝わる指導の継続が必要である。</p>		

■当てはまる ■まあまあ当てはまる ■あまり当てはまらない ■当てはまらない ■わからない

	取組指標	成果指標			分析
		教師	生徒	保護者	
9	生徒の実態に合わせ、個に応じた指導を展開している。				<p>教員の肯定的評価が9割以上と高く、生徒一人一人の状況に応じた指導を意識して実践していることがうかがえる。一方、生徒の肯定的評価は約8割、保護者は約7割強であり、教員評価との差が見られる。これは、個別の配慮や支援が教室で行われていても、生徒自身や家庭に十分に伝わっていない場合があることが要因と考えられる。今後は、個に応じた指導のねらいや支援内容を丁寧に説明し、学習や成長の変化を共有することで、生徒・保護者がその成果を実感できるようにしていくことが重要である。</p>
10	分かりやすく、生徒が主役となる主体的・協働的な授業実践をしている。				<p>教員・生徒の肯定的評価が約7割で、主体的・協働的な授業づくりに対する取組が校内で共有され、実践されており、生徒も肯定的に受け止めていることがうかがえる。一方、保護者の肯定的評価は約5割にとどまり、教員・生徒の評価との差が見られる。これは、保護者に授業改善の意図やねらいや、学習の成果が保護者に伝わっていないことが要因と考えられる。今後は、授業のねらいや学びの振り返りを丁寧に言い、生徒が「自分が主役の学び」であることを実感できるようにするとともに、その様子を保護者にも分かりやすく発信していくことが重要である。また、学校としての取組の充実も図る必要がある。</p>
11	いじめや不登校に対して適切に対応していると感じる。				<p>教員の約9割が肯定的に評価しており、組織的な対応体制や早期対応への共通理解が進んでいることが考えられる。また、教員と生徒・保護者の評価には差異があり、生徒・保護者の気持ちに寄り添った対応が必要である。生徒・保護者の一部には「わからない」と回答した層も見られ、実際に支援を受けた経験がない場合、対応の様子が見えにくいことが要因と考えられる。今後は、具体的な取組や対応の流れを分かりやすく伝え、安心感をさらに高めていくことが重要である。</p>
12	生徒の良さを認め、力を引き出す指導をしている。				<p>教員の肯定的評価が約9割と高く、生徒のよさを十分に認め、伸ばそうとする指導が行われていることがうかがえる。一方で、生徒の評価は約8割、保護者は約8割弱と、教員評価よりやや低い結果となっている。これは、教員が意図して行っている声掛けや支援が、生徒一人一人には十分に実感されていない場合や、家庭まで伝わりにくいことが要因と考えられる。引き続き、個々の成長や努力を具体的に言語化し、生徒・保護者と共有することで、指導の効果をより実感できるようにしていくことが重要である。</p>
13	教育活動に地域人材を積極的に活用している。				<p>教員の肯定的評価が約9割と極めて高く、地域人材を授業や行事等に取り入れる取組が進められていることが分かる。一方、生徒の肯定的評価は約8割、保護者も約7割になり、「わからない」とする回答も一定数見られる。地域人材の関わりが生徒にとっては日常的な学習活動として意識されにくく、また保護者にも具体的な活動内容が十分に伝わっていないことが要因と考えられる。今後は、地域人材の関わりや成果を生徒に振り返らせるとともに、学校だより、学校ホームページ等を通じて具体的な事例を発信していくことが重要である。</p>
14	保護者や地域の方に対して情報発信している。(学校公開、学校ホームページ、学校だより、学校だよりを含む)。				<p>教員の肯定的評価が約9割と高く、学校として積極的に情報発信に取り組んでいるという認識が共有されている。一部には「十分に届いていない」「分かりにくい」と感じている層と考えられる。情報発信はされているものの、必要な情報が埋もれてしまっている可能性や、発信手段が家庭の状況に十分合っていないことが要因と考えられる。今後は、発信内容の整理や重点化を図るとともに、閲覧しやすさや分かりやすさを意識した情報提供を進めていくことが重要である。</p>
15	特別支援学級における教育活動の充実と設置校である利点を生かしたインクルーシブな学校づくりが推進されている。				<p>他の項目に比べ、全体的に指標が低い傾向にある。特別支援学級の教育活動の充実や、全校体制でインクルーシブな学校づくりの取組を考へていく必要がある。理解教育の推進、交流及び協働学習の意義や実践内容を分かりやすく伝えるとともに、インクルーシブ教育の考え方を学校全体で共有しながら取り組み、発信していくことが重要である。</p>
16	狛江市が、狛江一中、狛江第一小、緑野小とともに一中ゾーンとしてコミュニティ・スクールの取り組み(管理職への業務発令、小中連携、地域人材の活用等)を進めていることを知っている。				<p>昨年度と比べ、1割程度肯定的評価が高くなっている。コミュニティ・スクールの取組や趣旨について理解され始めていることがうかがえる。「わからない」と回答した割合も少なくなると、取組自体は進められ理解されつつあるものの、制度的な仕組みが生徒や保護者に十分浸透していないことが考えられる。今後は、小中連携や地域人材活用の具体的な活動を通して、コミュニティ・スクールの意義や成果を分かりやすく伝えていくことが重要である。</p>